

朧月夜

白百合学園中学校 二年 坂東 茉由子

私は、友人と一緒に自宅からほど近い老人ホームで、定期的に演奏ボランティアの活動をしている。私はバイオリンを弾くのが得意なので、バイオリンを演奏し、それに合わせて友人が歌を歌うというボランティア活動だ。毎回、季節に合わせた唱歌や昭和に流行った歌謡曲を演奏する。歌謡曲では、美空ひばりさんの「川の流れるように」や坂本九さんの「上を向いて歩こう」が、いつ演奏しても喜んでもらえる人気のナンバーだ。そして、それと並んで人気の曲が唱歌「朧月夜」である。

「朧月夜」といえば、岡野貞一さん作曲、高野辰之さん作詞の、大正時代に作られた日本の代表的な唱歌だ。「菜の花畠に入り日薄れ、見渡す山の端霞深し。春風そよ吹く空を見れば、夕月かかりてにおい淡し。」という一番の歌詞は、誰でも心にすっと思ひ浮かぶと思う。私自身も小学校の時にこの曲を歌ったことがあり、よく知った曲だ。ただ、施設のお年寄りの方々がこの曲を私の演奏に合わせて一緒に歌ってくれる時、それは美空ひばりさんや坂本九さんの曲を演奏した時とは少し異なる印象を私に与える。一つ一つの歌詞をかみしめるように、どこか遠い空を見つめるように歌うその姿は、不思議と何とも言えない郷愁を伴って聞こえてくるのだ。

東京のマンションで生まれ育った私にとって、朧月夜は決して身近な存在ではない。私の家から見る月は、いつもリビングの窓から四角く切り取られた空の中に浮かぶ月だ。ビルとビルの間に見えるそれは、自然や季節とは別の世界に存在する光の塊のようにすら見える。だから、「朧月夜」の曲の冒頭の歌詞に出てくる「菜の花畠」も「見渡す山の端」も、私にとってはどちらかというと非日常的な世界観だ。ところが、認知症を患い、車椅子に乗ったお年寄りの方々が一斉にこの「朧月夜」を歌いだす時、私は目の前で歌う皆さんの中に、その懐かしい情景を感じ取ることができる。人間は誰でも老いていくが、そのような中でいつでも鮮やかに蘇ってくるのは、自分の幼き日々の出来事や、若い頃に経験した風景なのかもしれない。春の柔らかな風の中に、ぼんやりした月の光。小さい頃にどこかで見たような幻想的な風景が、お年寄りの皆さんの歌声を通じて私に語りかけてくる気がする。

これは、一つには、「朧月夜」という曲が持つ魅力、力であると言えるだろう。高

野辰之さんの格調高い歌詞と一緒に流れる、岡野貞一さんの優しく美しいメロディは、自然と心の中に溶け込み、温かい気持ちにさせてくれる。しかし、私は「朧月夜」から受けるノスタルジーは曲の力、それだけではないような気がする。それは、月そのものの力なのである。月は時を越えて常に存在し、私たちが日本中のどこに住んでいようと、青くひっそりと照らし続ける。たとえ人それぞれ、心に思い描く月の形が異なっただとしても、それは日本人の中に脈々と受け継がれてきた独自の自然観と重なり、哀愁や深い趣を感じさせる。そしてこれこそが、お年寄りの皆さんが「朧月夜」を愛し歌ってくださる所以だと思うのだ。ホームの皆さんが喜んでくださる限り、私は「朧月夜」の演奏を続けていきたいし、私自身も皆さんと一緒に、この曲の中に悠久の月を感じていたい。